

■札幌市白石区

咸臨丸最後の乗船者となった片倉一族は、一命をとりとめ、後発の船で小樽に到着し、開拓地となる石狩へ向かった。季節は真冬、病死する者もあったが、苦難の末にようやくたどり着き、苦渋の時代を乗り越えて今日の白石の礎を作り上げた。

■木古内町

明治4年(1871年)9月20日咸臨丸は函館から小樽に向かって出港したが、間もなくして何故か失速し、次第に木古内町サラキ岬の海岸に寄せられ、岩礁に乗り上げて座礁する。乗船者は全員現地(泉沢)の人々によって救助されたが、船体は数日後に海に沈み、咸臨丸は終焉を迎えた。

■横須賀市浦賀

安政7年(1860年)1月、咸臨丸は日米修好通商条約批准書交換のために、浦賀を出港し、37日間の苦難の航海の後、サンフランシスコに到着する。異国の驚異的な文明に感銘を受け、帰りは日本人のみでホルルルを経由して46日間の航海をへて5月5日に浦賀に投錨する。

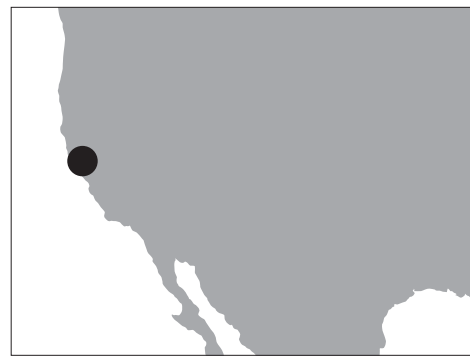
■小笠原村

文久元年(1862年)12月、咸臨丸は小笠原諸島が日本固有の領土であることを諸外国に宣言し、その領有権を調査するために品川を出港した。約4ヶ月の調査活動を終え翌年3月に帰港した。



■オランダ

嘉永6年(1853年)のペリー艦隊が浦賀沖に現れて以来、幕府は海軍力の増強を余儀なくされ、唯一の友好国であったオランダに軍艦を発注する。その一つが日本初の軍艦・咸臨丸である。十二門の大砲を備えた蒸気機関の咸臨丸は当時としては幕府の将来を支える要でもあった。



■サンフランシスコ

安政7年(1860年)浦賀を出港した咸臨丸の航海は暴風雨もあいまって苦難の連続であったが、グルック大尉等の米兵の協力もあって無事サンフランシスコに到着。サンフランシスコでは大歓迎を受けたが、勝海舟や福沢諭吉らは当時の米国の文明技術の高さに驚くとともに、その見聞はその後日本の近代化に大きな役割を果たした。